



あかちゃんとお母さんのための ビデオ上映会

8月10日(金) 午前11時～

会場：図書館2階 ハイビジョン室

内容：「くまのがっこう

ジャッキーのじてんしゃりょこう」(約37分)

対象：0歳から3歳までの子どもとその保護者

主催：北島町教育委員会事務局(☎088-698-9812)

■子育て支援の催しです。乳幼児とお母さん・お父さん歓迎。
大きなシートを用意しているので、赤ちゃんがはいはいしても、
よだれを垂らしても大丈夫。おむつ換えもできます。

きたじまひょうたん阿波おどり

8月14日(火) 午前11時～午後12時40分

会場：北島町立図書館3階 多目的ホール

主催：北島町商工会(☎088-698-2275)

■入場には会場前で配布される整理券(無料)が必要です。

植物と貝に名前を付ける会

8月18日(土) 午前10時～午後4時

会場：北島町立図書館2階 ギャラリー

講師：河野圭典先生(貝) 木下覺先生(植物)

お問い合わせ：北島町立図書館(☎088-698-1100)

■採集した植物や貝がらの名前はどやうやって調べるの？自分で調べただけ合っているのかな？—みなさんの「？」にお答えします。■申込みは不要です。採集物について、事前の下調べをお願いします。

徳永真一郎ギターリサイタル

8月19日(日) 午後2時開演

会場：図書館3階 多目的ホール

入場料：前売／一般2,000円 小中高生1,500円

当日／一般2,500円 小中高生2,000円

出演：徳永真一郎(ギタリスト・徳島市出身)

演奏予定曲目●クラヴサン曲集第2巻より「神秘的なバリケード」(F. クーブラン)、「ファンタジー第1番」(ド・フォッサ)、

「サパテアード」(デ・ラ・マーサ)ほか

主催：徳島ギター協会(川竹☎088-631-7893)



■パリで活躍中のギタリスト・徳永真一郎の帰国&CD発売記念公演が北島町で実現。■2016年7月パリ国立高等音楽院修士課程を首席卒業。2018年7月に待望の1stアルバムをリリース。ご注目ください。

第28回 北島町平和のつどい 「火垂るの墓」

8月25日(土) ①午前10時 ②午後2時

会場：図書館3階 多目的ホール 入場無料

内容：『火垂るの墓』

共催：北島町・北島町平和のつどい実行委員会

■2階ギャラリーで「広島・長崎原爆/徳島大空しゅう写真展」を同時開催します。(入場無料)

江富久雄◎こども写真展

8月31日(金)～9月2日(日)

会場：北島町立図書館2階 ギャラリー

午前10時から午後5時まで

主催：江富久雄こども写真展実行委員会(☎088-698-6888)

夏休みファミリー・コンサート 音楽の玉手箱

9月2日(日) 午後2時(1時30分開場)

会場：北島町立図書館3階 多目的ホール

入場料：前売／1,500円 当日／1,700円

演奏予定曲目●「エリーゼのために」(ベートーヴェン)、

「スコットランド・ソナタ」(メンデルスゾーン) ほか

出演：明口奈央・新居満里奈・林美甫・渡邊礼華・吉田一貴

森光平・桜田悟・柴崎紘生・森亮平

主催：小高音楽研究所(小高☎090-8868-9601)

文◎化◎ジ◎ャ◎一◎ナ◎ル

故郷は地球

～脚本家・佐々木守がめざしたもの④

S F 特撮研究家★池田憲章

講演採録●2007年2月25日●北島町立図書館・創世ホール

■「故郷は地球」の怪獣ジャミラは、アルジェリアの内戦で死んだ少女の名前から付けているわけです。ジャミラは、円盤に乗って国際平和会議を邪魔するためにやってきた謎の怪獣なわけですが、怪獣だと思っていたのが実は某国の宇宙パイロットが、打ち上げの失敗で宇宙を漂流して、ある星に流れ着いて、その星で何とか厳しい環境で生き抜こうとして身体が怪獣に変身を遂げて、怪物になった姿のまま地球に戻ってきたというのが真相でした。ところが地球では自分のことを忘れ去って、存在しないことにされてしまっている。復讐と怒りを込めて、彼は、国際平和会議という形ばかりの会合を妨害するために、攻撃を開始するわけです。

■そしてフランスからやってきたパリ本部のアラン隊員とやり取りするシーンはいかにも実相寺昭雄の映像なんですけど、夜のシーンで、撮影用のライトを林立させて、その中で俳優たちが浮かび上がって、ほぼ顔は半分シルエットのようになっている中での芝居が続くんですけど。

■アラン隊員が、怪物を見たときに「ジャミラ！」といったのをムラマツ隊長がおぼえていて、「なぜジャミラ、といったんですか？ 教えてください」と質問するわけです。それに対して、アラン隊員は「パリの科特隊本部の恐れていた最悪の事態になった」といいます。「あれは怪獣ではない。彼は人間なんだ。某国の宇宙パイロットが実はそうなって戻ってきた姿なんだ」といったときに、イデ隊員が「俺、やめた。俺には戦えない」といって、あらがうわけですね。

■要するに、科学のために宇宙パイロットになって、変わり果ててしまったジャミラの姿は俺たちの姿だというわけです。ジャミラは科学に命を懸けた俺たちの先輩なんだ、そのジャミラとどうして戦えるんだと。アランが、なんてことを言うんだと、イデの胸ぐらをつかみませんが、結局、ジャミラは一匹の宇宙怪獣として始末されることになるわけですね。

■その命令が下される場面で、実相寺さんは、撮影用のライトをバックにしてアラン隊員を全くのシルエットにして、まるで機械のような冷たさでしゃべらせた。「ジャミラを、一匹の宇宙怪獣として葬り去れ。それが国際平和会議を成功させる唯一の道だ」といって、パリの本部からの命令を伝えます。

■それでムラマツ隊長とかアキコ隊員などが、イデを説得しようとするんですが、イデは感極まって、空に向かって「バックヤロー！」と叫ぶんですね。

■結局、ジャミラと科特隊は戦うことになるんですけど、ウルトラマンが現われて、ウルトラ水流という武器を使ってジャミラを倒します。水の無い星で変身を遂げて怪獣になってしまったために、人間にとって一番必要な水が、ジャミラの命を絶つ兵器になってしまう。ウルトラマンの手からほとぼしる水流の中で、ジャミラは死んでいくわけですが、そのシークエンスで実相寺さんは録音班に「ここに赤ん坊の声を變形して、死んでゆくジャミラの声にして欲しい」と依頼した。そういう音響設計をやっているんですね。

■それで《科学と人類の進歩のために戦った戦士ここに眠る》というジャミラの追悼のプレートを作り、ムラマツたちが、それをみおろして「許してくれ。でも地球の土になれたからいいだろう」と話しかける。そのプレートの前にイデ隊員一人だけが立ちつくして、物語はクロージングするんですね。シナリオでは、そこまでだったんですけど、実相寺昭雄さんがそこに付け加えたのが「犠牲者はいつもこうだ。文句だけは美しいけれど」というセリフだったんですね。実相寺さんは、それを台本に鉛筆で書き足した。

■佐々木守は、試写でその完成作品を見るわけですが、そこでそのセリフに接したときに、「ああ、実相寺さんは、俺の作品を完成させてくれた」と。「あのセリフで、物語がさらにはっきりと姿を見せることができた」といって、非常に喜ばれるんですね。

■この「故郷は地球」なんかに見える一つの物語というのは「科特隊も人間なり」ということですね。ですから実相寺さんは佐々木さんのシナリオを受けてですね。例えば「真珠貝防衛司令」では、フジアキコ隊員が銀ブラをするわけですね。科特隊の給料日に——科特隊の給料日っていうのも凄いですけども（笑い）——そこで洋服も買いたい、帽子も買いたい、みたいなことになって、イデ隊員がおつきになって「勘弁してくださいよ～」とかいいながら、銀ブラをするわけですが、そこらあたりの女性らしい視点とか、あるいはイデ隊員が人間としてジャミラの運命をみつめたときに、科特隊員イデではなく、人間イデに戻れる、そういう台本の作り方というのが佐々木さんの一つの視点になるわけですね。実相寺さんは、それを真っ向から受けて映像化した。

■それは、例えば一見コメディ風に見える「怪獣墓場」という作品、骨だらけのシーボーズという怪獣が宇宙の怪獣墓場から落ちてくるという、これは一種の寓話劇ですけども。科特隊が宇宙をパトロールしていると、宇宙空間に怪獣たちが浮いている。それは、どこの世界でも攻撃されて追い出される怪獣たちが、安息の眠りにについている怪獣墓場という場所なんです。そこから宇宙ロケットにつかまって一匹の怪獣が落ちてくるという、いわばおとぎ話みたいな話なんですけど。

■結局、その怪獣は霞が関ビルに登って、空に向かって「帰りたい」みたいなそぶりを見せる。仲間を呼んでいるのだろうか、とか、単に宇宙に帰りたいのでは、などと隊員たちが推測している内に、ビルの屋上から手をパタパタさせて、ぴよこんとジャンプして地面に落ちこちる。「ばっかだなあ、飛べもしねえのに」という趣旨のことをイデ隊員が言うわけですが、やがて夜のシーンになって「なんで墓場なんか恋しいんだろう」と隊員たちが話し合う。「暗く寂しいところばかりじゃないか」と、隊員たちが話している。するとフジアキコ隊員の横顔がライトの中に浮かび上がる。「違うわ。どの星でも攻撃され、追い出される怪獣たちにとって、安息の場所というのは墓場だけに違いないわ」、そんなセリフをフジアキコ隊員が言うんですね。そこに、攻撃され続け、叫び続ける怪獣たちの映像が流れます。そういう一人の肉体的な視点をを用いることによって、科特隊の正義とかウルトラマンの持っている正義に対して、人間主義として対立する構図を佐々木守さんと実相寺さんは作り上げるわけですね。

■今回、ぜひ強調したいのは、佐々木守と実相寺昭雄監督は「ウルトラマン」と次の「ウルトラセブン」、さらに「怪奇大作戦」と昭和41年から44年にかけて円谷プロで仕事をするわけですが、ほぼ同じ時期に同じTBSで放映された「七人の刑事」という、社会派刑事ドラマといわれた名物番組での佐々木さんの仕事についてです。芦田伸介さんとか堀雄二さん

とか佐藤英夫さんたちが演じる7人の刑事が、色々な事件を追う中で、社会の様々な問題に出会ってゆくという名物番組でした。

■佐々木守さんは、その番組に昭和40年から今野勉さんという今テレビマンユニオンの副会長ですけど、その人とコンビを組んで13本作品を送り続けるんですね。実は、「ウルトラマン」なんかは「七人の刑事」と並行しながら作られた作品でもあるわけです。ちょうど先ほどお話しした、大島渚監督の創造社の作品もそうですね。

■今野勉さんも昭和11年生まれで、佐々木さんとは同年代のディレクターですね。今日、みなさんにお配りしているパンフレットに提供させていただいた佐々木さんの写真は、今野さんが初めて佐々木さんとコンビを組むことになり、そのためにお二人で広島と長崎にロケハンに行った際の写真です。長崎の母子像の前で撮影したのもですね。

■ロケハンといっても、今野さんにしてみたら佐々木守がどういふ奴か知りたかったというので、何日もかけて一緒にまわった。その際、広島で会った屋台のおばさんが話した女の人の物語をもとにして作られたのが、「白い少女」という作品でした。「白い少女」は、佐々木守脚本・今野勉監督コンビ作品の第1号なわけです。

■そのあと「七人の刑事」の中で「歌謡曲シリーズ」というのを、この二人は、やり始めるわけですね。当時、佐々木守さんもジャズが好きだったり、歌謡曲も大好きで、色んなレコードをみんな買って、カラオケじゃないですが、大島さんたちや今野さんたちとも、よく歌合戦になったと聞いています。

■そんな中で、流行歌を題材にしよとなった。当時、今野さんは笹塚に住まわっていて、同じ笹塚のすぐ近くのマンションに佐々木守が仕事を構えていた。その当時はやっていた流行歌の歌謡曲のレコードを大量に買ってくるんですね。それを佐々木さんの事務所で二人で聞きながら、どの曲を使って作品を作ろうか、と。

■要するに流行歌というのは、そのときの社会の気持ちとか雰囲気とか、あるいは誰かの悲しみとか、女の子のピュアな思いだとか、あらゆる人の耳に入ってなじんでいる。それをある種裏切って、7人の刑事たちがとまどうような、立ち止まらざるを得ない、刑事たちが全く理解できないような事件像（それは当然若者の犯罪や、やむなく起きた事件、偶然起きてしまった犯罪などですが）、それを、流行歌を素材に作ってみようか。これは二人にとっても挑戦だったわけですね。

■「時には母のない子のように」とか「ふたりだけの銀座」などがそれです。ここに持参したDVDは、市販されているものではありませんが「ふたりだけの銀座」です（素材になった歌の曲名は、デュエット曲の「二人の銀座」）。佐々木守さんがシナリオを書いて、今野勉さんが演出をした作品です。当時「七人の刑事」というのは、すべてスタジオ・ドラマで、ロケーションの部分だけフィルムで撮ってインサートしてやっていたんですが、この「ふたりだけの銀座」というのは全編フィルムで撮影したものです。銀座のみゆき通りを中心に隠し撮りで、「二人の銀座」が流れているドラマなんですね。これは、清瀬で少年院を脱走した8人のティーンエイジャーの少年たちがサラリーマンを襲って強盗をし、金を奪って逃げますが、どうも千葉県方面に逃げたらしいと。その事件に純朴な漁師の寺田農（てらだ・みのり）と恋人の吉田日出子が巻き込まれる作品でした。

■「怪奇大作戦/死神の子守歌」は、この「七人の刑事」の歌謡曲シリーズの経験で、佐々木さんが鍛えられて結実した作品だったといってもよいのではないかと思います。（次号に続く／採録・文責＝小西昌幸）